

青丘文庫 月報

No.142

99年10月1日

図書室 〒650-0017 神戸市中央区楠町 7-2-1 神戸市立中央図書館内

Tel 078-371-3351 相談専用Tel 078-341-6737

編集人 〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1 (財)神戸学生青年センター内

飛田 雄一 Tel 078-851-2760 FAX 078-821-5878

郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料 3000 円

ホームページ <http://www.hyogo-iic.ne.jp/~rokko/sb.html>

巻頭エッセイ

「加藤清正」

金慶海



この夏、九州の熊本市であった「第10回朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流集会 in きゅうしゅう」に参加した。その第二分科会「壬辰倭乱」と現代に二日間出席した。いい勉強になった。

【大阪朝日新聞】、【神戸新聞】、【神戸又新日報】で報道されている在日朝鮮人、朝鮮本国、朝鮮と日本との関連記事などについての1910年分までのを収集しているが、それらには加藤清正についての記事もあったので、私はそれをもとに知ったかぶりをして、『加藤清正についての新聞報道など』と題して報告をした。

その要旨は、I。北関大捷碑

この碑は、清正の朝鮮の東北部侵略を撃退した記念碑。と同時に、清正の人的物的な数々の野蛮な犯罪行為。

II。記念行事 — 清正の死後三百年祭

清正の死亡は1611年だから、当然、1911年に清正の三百年祭を行うはずだろうに、なぜ、その二年前の1909年に大々的に行ったのか？への疑問。私は、この三百年祭に焦点を合せた。

III。講談と『清正公のお祭』

上述の記念行事と関連して、清正についての行事が1909年に大々的に行われる。

IV。朝鮮侵略への世論操作

V。両国の現在の教科書が見た秀吉の朝鮮侵略観だった。

先に、“知ったかぶりをして”と書いたが、以上のような内容の報告については、参加者のほぼ全員が知っていたからだった。で、恥を感じた。

参加していた日本人らを観ながら、戦後、日本国民の良識が高まり、一時期の朝鮮と日本の良くない関係を正しく清算して、両国のこれからの永遠な友好を築いていこうとする姿勢を十分に見ることができたことが、今回参加した私の最大の成果だった。

でも、こんなことには疑問符を打つ。

加藤清正のことを、地元、熊本では、“清正公〔せいしょうこう〕さんと親しまれている”、とのある報告者の発言だ。その理由として、熊本城の築城、新田の開発、河川の改修などを挙

げていた。

朝鮮侵略の時に、あれほどの非人道的な殺戮と略奪行為を行ったヒトデナシ、を。

朝鮮への侵略前に豊臣秀吉の命令で熊本地方での数々の一揆を無慈悲に鎮圧した清正。

それに、朝鮮の現地で自分の将兵の反乱にあたり、命令を聞かない兵士らを平気で殺したりした、その清正を、と唾然した。記録によれば、清正の侵略軍の半数が、反乱や戦死している。戦死した遺家族らの怨念のこもった思いが、彼の報告にはない。あの巨大な熊本城の築城にしたって、朝鮮で略奪した金銀のおかげだろう。

清正の死亡四百年を二年後に迎える。どう迎えるべきだろうか？清正の実像と虚像をはっきりとすべきだ。

第181回 朝鮮民族運動史研究会（7月18日）

森川展昭「1950年代後半期の延辺での民族整風運動について」（省略）



第216回 在日朝鮮人運動史研究会（6月13日）

『在日』外国人の高齢化と社会福祉——神戸市長田区の在日韓国・朝鮮人一世をと
おして」

吉坂 有香

私が青丘文庫で卒論を発表する事になったのは、センターの館長である飛田さんがゼミのホームページにアクセスしたのがきっかけだった。私自身、在日韓国朝鮮人問題に興味があってこのテーマで卒論を書いたのではなく、たまたま高齢化福祉を外国人という観点から捉えた時に浮上してきた問題だった。言い換えれば私は「在日」問題を福祉という観点から捉えたわけである。だから「在日」問題に関してまだまだ無知な私なんかよりもずっと知識を持っておられるセンターの皆さんの前で発表できるのかすごく不安だったが1人でも多くの方に高齢「在日」一世の方達の現状を知ってもらえるならと発表する事にした。

今、日本は急速なスピードで高齢化が進んでいる。西暦2000年からは公的介護保険が導入される事が決定した。それに伴い、デイサービス・ホームヘルパーなどの在宅サービス、特別養護老人ホームなどの施設サービスの促進がはかられている。福祉は今後ますます「施される福祉」から「自分達で選ぶ福祉」へと発展していこうとしている。だがその流れから取り残されている人たちがいる。在日韓国・朝鮮人一世の人たちだ。「在日」一世の人たちも着実に高齢化している。彼らは社会保障の変換の歴史の中で数々の差別を受けてきた。現在に至っても老後の生活基盤である国民年金の受給資格がない人がほとんどだ。また制度上は日本人と同じように福祉サービスを受けられる事になっているが、食習慣の違い・日本人に対しての気がねなどからサービスを敬遠しがちだ。教育を受ける機会がなかったため、日本語はおろか母国語においてさえ識字率が低く行政の福祉情報から取り残されている。つまり彼(女)らは自分達でサービスを選ぶにもサービスがわからない、また現存しているサービスも受け難いという状況なのである。

このような現実をセンターで発表する事によって、多くの人の意見が聞けて私自身とてもためになった。だがそれだけで満足してはいけない事も知らされた。この問題をこれ以上深刻化させないために私たちにできる事は何か。それが大きな課題だと思う。

SAISON

神戸 13版

1999年(平成11年)7月28日

水

展望室から港を眺める黄国
明さん＝神戸市中央区波止
場町の神戸ポートタワーで



戦中に中国から連行された黄さん

港の強制労働を証言

再訪に複雑な心情

「港での労働、食事はそれはひどいものでした」

――太平洋戦争末期の一九四四年、中国から日本に港湾労働者として強制連行された黄国明さん（七二）が十七日、労働現場だった神戸港を訪れた。夕方には証言集会も開かれ、約五十人が黄さんの話に耳を傾けた。主催の市民団体によると、神戸港の強制労働につ

いてのこうした集会は初めて。

河南省の農民だった黄さんは四四年八月に日本軍に捕まり、強制連行された。神戸港などで船荷の積みおろしに従事、四五年秋に帰国した。この日は市民団体の有志ら九人と神戸ポートタワーから港を一望し、宿舍があったとみられる同市中央区北長狭通七丁目周辺

を訪れた。

黄さんは「宿舍と港を往復していただけで、そのほかの場所は覚えていない」と話しながらも、休みなしで連日、朝から晩まで働いたと身ぶりを交えながら語った。一回の食事がまんじゅう二個だけだったため、空腹から積み荷の生米を口に含んだり、日本人が食べたみかんの皮を食べたりした経験もあると述べた。

また、神戸と日本に対して、「一般の人からひどいことをされた訳ではない。神戸に悪い感情は持っていない」と話したものの、「強制連行という状況をつくった人たちにはやはり恨みがある」と複雑な心情を見せた。

黄さんを招いた「神戸・南京をむすぶ会」（事務局・神戸学生青年センター、078・851・2760）は中国・南京を訪れたり、中国人を招いた証言集会を開いたりするなど日本の中国侵略を検証する試みを続けている。飛田雄一事務局長は「地元の神戸で何があったかを知ること重要。調査を継続したい」と今後当時の様子を知る人を探していくという。

青丘文庫研究会のご案内

※10月10日が休館のため研究会は3日です。

第218回 在日朝鮮人運動史研究会会

1999年10月3日(日) 午後3時～5時

報告者 福井 譲

テーマ「W.H.ウオーレン氏の『Koreans in Japan : Movement, distribution, and landscape』(Ph.D dissertation, University of Hawaii, 1996)について」

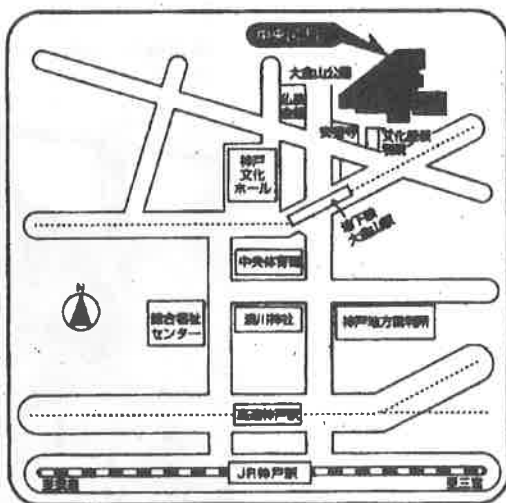
第181回 朝鮮民族運動史研究会

10月3日(日) 午後1時～3時

報告者 金森 襄作

テーマ「延辺公有地分配—1946年—について」

※会場はいずれも青丘文庫(神戸市立中央図書館内、地図参照)



【研究会の予定】

11月14日(日) 民族(クリスティニー) 在日(飛田雄一)

【月報巻頭のエッセー】

11月号(高正子) 12月号(クリスティニー)

2000年1月号(伊地知紀子) ※前月の20日に原稿をよろしく。



神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会・結成集会

10月14日(木) 午後6時30分

於/神戸学生青年センター・ホール

神戸電鉄敷設工事朝鮮人犠牲者追悼会&焼肉の会

10月17日(日) 12:00 モニュメント前

その後、事故現場の鳥原貯水池公園で焼肉の会です。

参加申込みは、飛田まで。

朝鮮史セミナー/光州学生運動70周年記念講演会

11月6日(土) 午後2時 講師/姜在彦氏、水野直樹氏

於/神戸学生青年センター